

## 2014年12月の大気大循環と世界の天候

### 大気大循環

月平均500 hPa 高度を見ると、東シベリアでブロッキング高気圧が発達し、極うずは平年と比べて大西洋側に偏った。シベリアから北極海、カナダ東部から大西洋は正偏差、グリーンランドからロシア北西部は負偏差となった。日本付近では明瞭なトラフとなった。亜熱帯ジェット気流は中国から日付変更線付近で平年より強かった。シベリア高気圧とアリューシャン低気圧は平年より強く、日本付近では西高東低の冬型の気圧配置が平年より強かった。

熱帯の対流活動は、アラビア海、インド、インド洋東部、インドネシア付近、南シナ海、太平洋中部で活発、インド洋西部の南半球側、太平洋西部の南半球側で不活発だった。赤道季節内振動に伴う対流活発な位相は、月の前半はインドネシア付近から太平洋を、月の後半はインド洋からインドネシア付近を、いずれも大きな振幅で東進した。対流圏下層の赤道域では、インド洋で西風偏差が卓越し、太平洋西部では東風偏差となった。対流圏上層では、中国南部付近で高気圧性

循環偏差、日本付近で低気圧性循環偏差となった。南方振動指数は $-0.4$  だった。

### 世界の天候

2014年12月の世界の月平均気温偏差は $+0.31^{\circ}\text{C}$  (速報値)で、1891年の統計開始以来、最も高い値となった。12月の世界の平均気温は、上昇傾向が続いており、長期的な上昇率は約 $0.72^{\circ}\text{C}/100$ 年 (速報値)である。

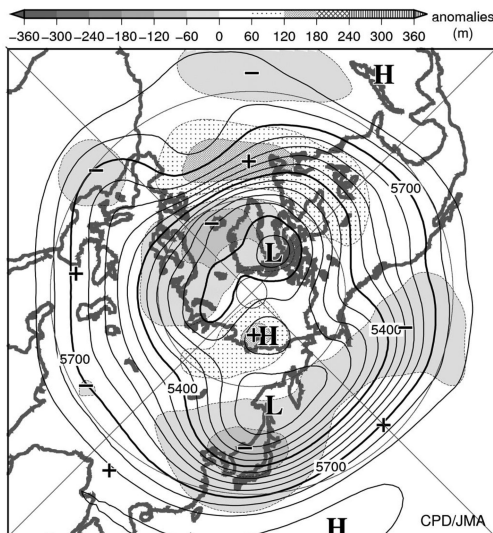
主な異常天候発生地域は次のとおり。

- ヨーロッパ北西部・南東部では異常多雨となった。
- 米国西部～メキシコでは異常高温となった。
- オーストラリア北部では異常高温となった。

(気象庁 地球環境・海洋部 気候情報課)

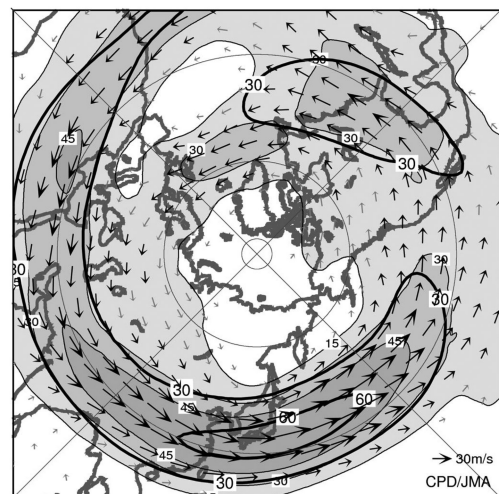
※ より詳細な情報については、気象庁ホームページ「気候系監視速報」をご覧ください。

<http://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/diag/sokuho/index.html>



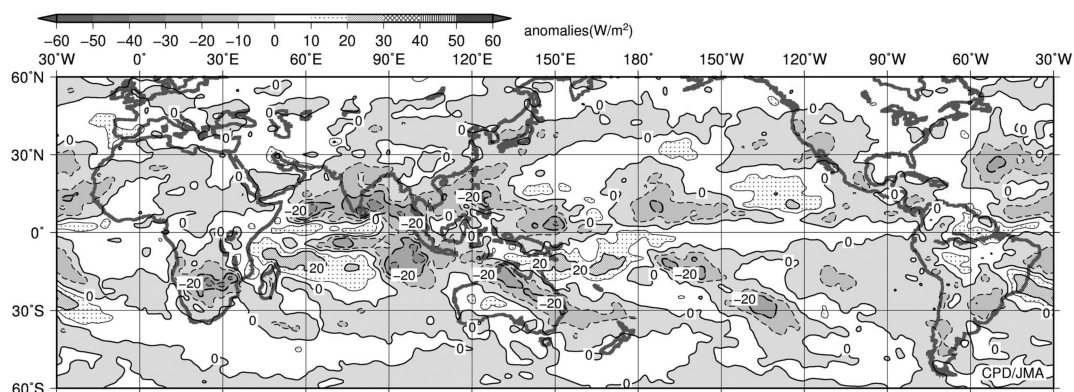
2014年12月の北半球月平均 500 hPa 高度および平年偏差

等値線間隔は60 m。陰影は平年偏差。平年値は1981～2010年の平均値。

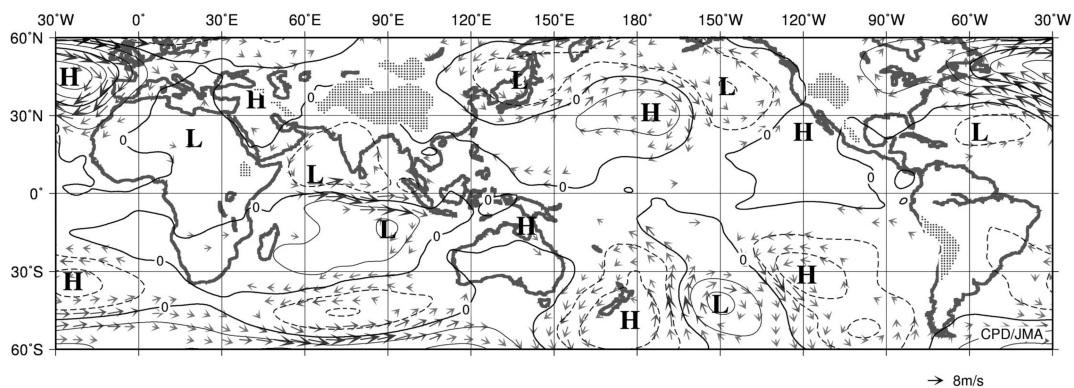


2014年12月の北半球月平均 200 hPa 風速および風ベクトル

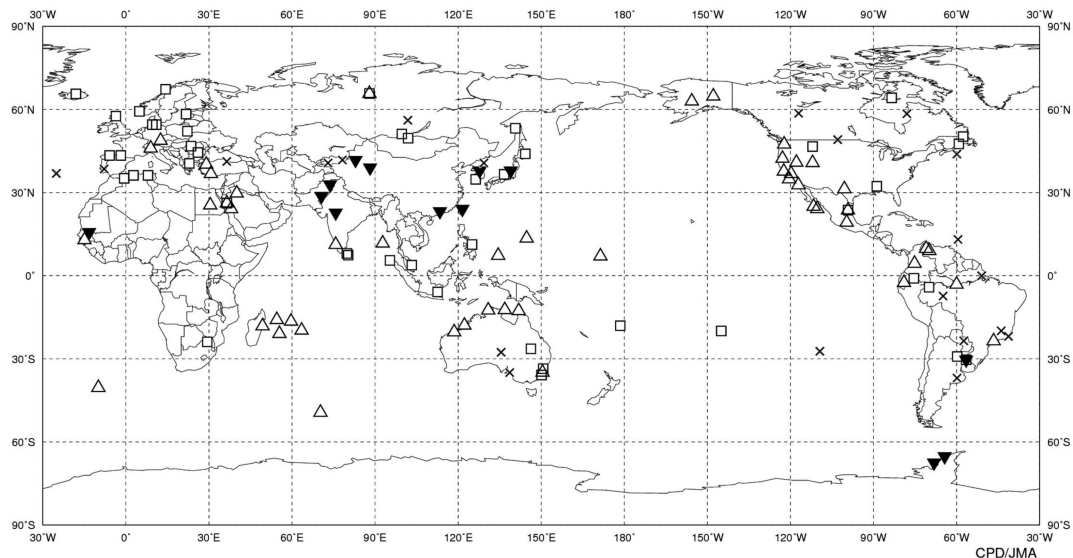
等値線間隔は15 m/s。太実線で囲まれた領域は平年の30 m/s以上の領域を示す。平年値は1981～2010年の平均値。



2014年12月の月平均外向き長波放射量年偏差  
 等値線間隔は10 W/m<sup>2</sup>で、値が小さいほど対流活動が活発であったと推測される。米国海洋大気庁（NOAA）より提供されたデータを用いて作成。年偏差は1981～2010年の平均値。



2014年12月の月平均 850 hPa 流線関数年偏差及び風年偏差ベクトル  
 流線関数の偏差の等値線間隔は $2 \times 10^6 \text{ m}^2/\text{s}$ 。年偏差は1981～2010年の平均値。



2014年12月の世界の異常天候分布図 △異常高温 ▼異常低温 □異常多雨 ×異常少雨  
 異常高温・低温は標準偏差の1.83倍を超える場合、異常多雨・少雨は降水5分位値が6および0。